

俳句

みずた

水田のぶほ

宇部市・田布施町
(1898～1963)



【著作】

句集『二人静』（昭和31・京鹿子社 共著）
句集『二人静 第二』（昭和39 共著）

山口大学医学部の図書館そばの木立に囲まれるように水田のぶほの句碑「月の萩 滝の如くに かゝりたり」がある。その句碑のすぐうしろに千代子夫人の句碑「別れ来し 京の 萩より 濃き野萩」が寄り添うようにあり、俳句を愛し、多くの俳人を育て、山口県俳壇の振興に尽くした俳人夫婦の熱い思いがそここから漂ってくる。

のぶほは、こよなく萩を愛した。宇部市島の自宅の庭にも白萩と紅萩がある。医学部構内に建立の句碑の周囲にも、句に寄せて自宅から移植した白萩があり、花の季節を迎えると、在りし日ののぶほを偲ぶかのように咲き乱れる。これもものぶほが医者として、俳人として多くの人たちに慕われ、愛された証しである。

昭和三十一年（一九五六）にはじめて出版された句集『二人静』、それにつぐ第二句集『二人静』はのぶほの存命中に出版の予定だったが、日の目をみたのは亡くなった翌年の昭和三十九年（一九六四）だった。特筆されるのは、いずれも千代子夫人との共著ということである。『オシドリ俳人』という言葉がこれほど似合う夫婦は他にない。高浜虚子は『二人静』に「花を愛で 二人静の舞を愛で」の句を贈っている。

のぶほは、明治三十一年（一八九八）、現在の熊毛郡田布施町に生まれた。生家は海に近く、裏の門をくぐると、眼前には国木田独歩が『酒中日記』のなかで書いている馬島が浮び、穏やかな瀬戸の海が広がる。俳句との出会いは、京都帝国大学医学部での師、松尾いはほ（本名・巖 第一内科教授）に勧められたのが始まりだった。

松尾いはほをはじめ、高浜虚子、第一内科の同僚で、俳誌『九年母』主宰の五十嵐播水、俳誌『かつらぎ』主宰の阿波野青畝ら一流の師、句友に恵まれ、句作と取り組んできた。医者としての使命を果たし、俳人としての作品の素晴らしさだけでなく、地元の宇部市はもとより、医者仲間や山口県俳壇の指導者として、多くの愛好者を育ててきた功績は大きい。それは生まれた田布施町別府公民館前庭にある句碑「ふるさとの 潮さす井戸や 月見草」や、鶴を愛し、毎年のように八代を吟行に訪れ、句碑「鶴戻り来るや しみじみ 夕こゝろ」などとして残っている。多くの俳人に愛され、惜しまれながらも病魔には勝てず、六十六歳で黄泉の国へと旅立った。

（文・いいだ すすむ）



山口大学医学部構内句碑（宇部市）



句集『二人静』

水田のぶほ 年譜

（提供・いいだ すすむ）

3月17日、山口県熊毛郡麻里府村（現・田布施町）大字別府に生まれる。本名・信夫。

3月、山口県立徳山中学校入学。（麻里府村小学校を経て）

4月、第三高等学校へ入学。

4月、医者を目指して京都帝国大学医学部へ入学。

10月、熊毛郡室津町（現・上関町）出身の吉田千代子と結婚。京都での新婚生活がはじまる。

6月、京都帝国大学を卒業。

7月、京都帝国大学医学部の第二内科学講座の副手に就任する。

1月、医学博士の学位を授与される。

9月、京都帝国大学医学部を卒業したあと、第一内科教授の松尾いはほ（巖）の下で内科学を専攻。その松尾の音頭で教職員の俳句会「蜻蛉会」が発足し、同じ内科で研究していたのぶほも参加、俳句との出会いである。

11月、京都帝国大学医学部の講師に就任する。

5月、京都帝国大学医学部の内科および栄養治療教室の助教授に就任する。

9月、京都帝国大学医学部助教授を退官、三高・帝大医学部と二十三年間にわたる京都生活に別れをつける。その一か月後の10月、山口県宇部市にある沖の山同仁病院の院長に就任する。

2月、沖の山同仁病院長と山口県立医学専門学校専任講師を兼務する。

宇部緑雨句会を設立し、主宰を務める。宇部市を中心に周辺の俳句愛好家と交流、親交を深める。

7月、沖の山同仁病院院長を辞任し、山口県立医学専門学校の専任講師に専念する。

11月、山口県立医学専門学校の第一内科学教室教授および付属病院長に就任する。

4月、山口県立医科大学に学校名が変更される。

伝統俳句の先導役にあった俳誌『ホトトギス』同人に推挙される。

10月、山口県立医科大学付属病院院長を辞任。引き続き第一内科教授は務める。

7月、千代子夫人と共著の句集『二人静』を出版する。高浜虚子が「花を愛で 二人静の舞を愛で」の句を贈っている。師の松尾いはほは「俳諧も二人静のふたり連れ」と、同僚の五十嵐播水は「歩み来て二本の花のさかりかな」とそれぞれ詠み、オシドリ俳人のはじめての句集出版を祝っている。

10月18日、癌が骨に転移して死去。法名「寿光院釋信甫」、宇部市小串の宗隣寺墓苑に眠る。

勲四等瑞宝章受章。



九、一三

舌打はたしかに鶴早やも来し
病床と鶴の枝と水平に
病む故に鶴ことさら親しかり
鳴き出せし鈴虫になお鶴あり
こぜわしく啼くとき鶴夫婦あり

（『二人静 第二』所収）

病床で作り、マジックペンで書いた最後の句

『二人静 第二』は、昭和31年～38年の句を所収